

メダカの飼育

メダカの飼育

●水槽

ガラス製60cm水槽(約57L)が一般的です。水質の変化が緩やかで、30～40匹くらい飼育できます。

また、プラスチック製30cmぐらいの水槽も利用できます。取り扱いが簡単で、10匹ぐらい飼育できるので、いくつか並べてグループごとに観察できます。

●水

水道水には、消毒のための塩素が含まれているので、1～2日ほど日光に当てたくみ置きの水か、市販の塩素除去剤を使った水を利用しましょう。

●底砂

水の浄化、水草の根の保持に役立ちます。一般には、大磯砂がよく使われますが、よく洗った赤玉土も適しています。

●えさ

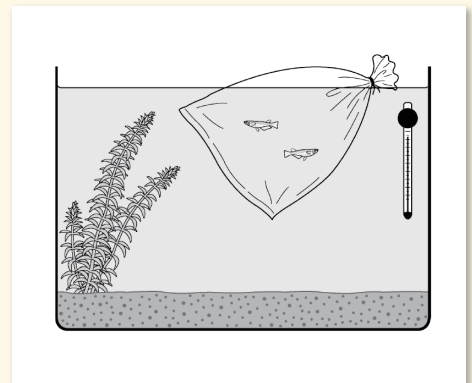
メダカ用のえさ(キンギョ用のえさを小さくすりつぶしてもよい)は、乾燥ミジンコなどが市販されています。採集できる環境があれば、生きたミジンコを与えてもよいでしょう。与えるえさの量は、食べ残しが出ないように、何回かに分けて与えるようにしましょう。

●ヒーター・水温計

メダカの産卵とふ化に最適な温度は25℃前後といわれています。水温が低いと、ふ化までに倍の日数がかかってしまう場合があるので、ヒーターや温度計を利用し、適温を保つようにしましょう。

●水槽への移動

メダカは生育温度領域が広い(1～40℃)といわれていますが、急激な温度変化により弱ってしまうことがあります。メダカを入手した後、水ごとポリエチレンの袋に移し、あらかじめくみ置きの水を入れて準備しておいた水槽に、ポリエチレンの袋ごと浮かせて水温を合わせます。その後で袋の口を開け、水槽の水質に慣らしながらメダカを水槽に入れましょう。



ほ乳類の誕生と子育て

ほ乳類の誕生と子育ての方法には、さまざまなものがあります。図鑑やインターネット、テレビ番組などを利用してそれぞれの生物のすがたに触れると、生物の多様性を学ぶよい機会となります。

●未熟な子を産むもの

目も見えず、歯も毛も生えていない未熟な子を産む生物は、肉食動物とサルやモグラ、コウモリ、ネズミなどの仲間です。たいていは巣をつくり、生まれてからしばらくの間は母乳で育てます。歯が生えてくると、ヒトと同じように母親がやわらかくした離乳食のようなものを食べ、徐々に大人と同じものを食べるようになります。

●発育した状態の子を産むもの

おもに草食動物で、生まれたときには毛も生えていて目も見え、音も聞こえ、数時間後には自分で歩くことができます。母乳を飲みながら、しばらくすると自分で草も食べるようになります。

ネズミの仲間である最大のカピバラやモルモット、チンチラなどの仲間は、生まれてすぐに自分の力で動き回り、草を食べ始めます。

●超未熟な子を産む有袋類

コアラやカンガルーなどは、胎盤が発達しないため、受精後30日ほどで出産します。有袋類の子の体重は0.5～1gほどで非常に軽く、未熟な状態で生まれてきますが、前足に発達した大きな爪があり、腹のしわが変化した母親の育児のうに自力で入ります。育児のうの中に入った子は、乳頭に吸いついて数か月間を過ごします。

有袋類は、主にオーストラリアに多く生息しています。これは、競争相手となる他の大型ほ乳類がいなかったためと考えられています。

本単元では、学習の動機づけとして、児童が生まれてきたときのようすなどを保護者にたずねてくることも想定されますが、個々の家庭の事情や児童の出生時の状況、心情への配慮等を忘れてはいけません。また、生まれるまでの期間や出生時の身長・体重などには個人差があることにも配慮しましょう。

